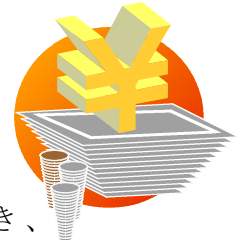


学校 便り	中種子町立星原小学校	令和8年度第3号	 中種子町立 星原小学校 きらきらブログ http://hoshihara.synapse-blog.jp/
	いwashimizu	令和8年6月22日発行	

お金のありがたみを知る

校長 米村 圭史

かつて給与が現金で手渡されていた頃、事務室で給料袋を受け取るたびに「今月も頑張ったな」という確かな手応えがありました。その日ばかりは、自分へのご褒美としてプチ贅沢を楽しみ、「よし、また明日から頑張ろう」と心にスイッチを入れていたものです。独身時代は、いただいた給与を「家賃」「食費」「光熱費」などと手書きした封筒に仕分けしてやりくりしていました。働いて、お金をいただき、生活を営む。それは人間らしい当たり前の営みでした。



時代は流れ、現代のお金の流れはすっかりスマートになりました。給与は口座振り込みとなり、スマホを使って、電子マネーとしてお店での買い物も行われます。画面上の数字が変わるだけのやり取りは便利ですが、現金の手触りを通じてお金の重みを学んだ世代としては、どこか一抹の寂しさを覚えることもあります。

子供たちは今、自分で働いてお金を稼ぐことはできません。しかし、日々の暮らしのなかで「お金のありがたみ」を学ぶ機会はたくさんあります。それは単に「節約する」という意味ではありません。お金の向こう側にある「誰かの苦労や想い」を想像し、我慢することや、感謝する心を育むことにつながっているのです。

私の父は、倉庫会社のサラリーマンでした。決して裕福ではありませんでしたが、母はパートで働きながら、私たち兄弟に常々こう言って聞かせました。「お父さんが毎日、一生懸命働いてくれるおかげで、私たちはこうしてご飯が食べられるんだよ」それが母の口癖でした。母の言葉を聞くうちに、幼い私は「いつも汗を流している父にプレゼントをしたい」と思うようになりました。お年玉などをコツコツ貯めたわずかな小遣いを握りしめ、近所のお店で選んだのは、一枚のハンカチでした。私にとっては人生で初めての大きな買い物です。給料日の夜、緊張しながら手渡すと、父は一瞬きょとんとした後、不器用な手で私の頭を何度も撫でてくれました。いつもは無口な父の目が、じんわりと赤くなっていたのを覚えています。「自分が我慢して貯めたお金で、誰かを笑顔にできる喜び」を、私はこの時、初めて肌で学びました。

そんな父の給料日になると、母は必ず真っ先に新しいお米を買ってきました。夕暮れ時、母が嬉しそうに買ってきたばかりのお米を米びつへと移し替えていました。サラサラと音を立てて満たされていく様子を見つめながら、母はぼつりと呟いたのです。

「ああ、これで今月もみんなで生きていける。米びつがいっぱいになると、お母さんは本当に幸せだなあ…」幼かった私が米びつにそっと触れてみると、まだほんのりと温かいお米の感触が、父の額の汗や、家族を支える母の祈りと重なったような気がしました。私たち兄弟が、毎日のご飯を最後の一粒まで大切にいただくようになったのは、この日のお米の温もりを忘れなかったからかもしれません。

便利なデジタル社会だからこそ、私たちは子供たちに伝えていかなければなりません。画面に映る数字の向こう側には、親の「家族を想う時間と努力」があります。それに気付いたとき、子供たちの心には、本当の意味での「我慢する強さ」と「感謝の心」が育つと信じています。御家庭でもぜひ、お仕事のお話や、暮らしを支え合うお互いの苦労について、温かい言葉で語り合ってみてください。